

れでいる李賀について氏は例をあげていないので、わたしの筆もひかえざるをえないが、たぶん、唯美主義詩人とかデカダン詩人とかいった見方をすればであろう。李賀は唯美主義者なんではない。魯迅が「私はゼイタク本を嗜むし」（一九三五年六月十日付増田氏宛書簡）といったような意味でゼイタクを「のみ美を愛しはしただろうけれど。

『魯迅日記』（一九六二年人民文学出版社刊）はその編纂の時期から考へて、編者による改変が加わっているものと考へられ注意しなければならぬようだが、李賀とのかかわりを考えつけく面ではさほど支障はないだろう。（この日記は一九一二年（二十五歳、数え年）から一九三六年（四十二歳）までである。）

一九一二年八月二日。午前二時（周作人一憲）の二十七日付の便りをうけどる。范愛農を哀しむ詩がある「天下無獨行，舉世成委靡；皓皓范夫子，生此叔季豎；傲骨遺俗嫉，暁被蝶蠅欺：侘傺盡一世，墨生潘水湄。今聞此人死，令我心傷悲；揚揚使君輩，長亦爾爲？」

この詩には李賀の詩の影がさしてゐる感じがする。ただし、これは周作人の作だ。魯迅はこれに觸発されて「范君を哀しむ 三章」を作った。『集外集』に收める。ここでは『魯迅全集』（一九五八年人民文学出版社）卷七による。

風雨飄搖日、 風が吹き、雨の降る日  
余杯元愛农、 わたしへ范愛農をあもづ

华顛萎寥落，  
白眼看鶴虫。  
世味秋荼苦，  
人間直道穷。  
奈何三月別，  
竟尔失所躬！

ゴマ塩頭にしよばくれてたが  
由けらどもにはそっぽむいた  
世間ににがい秋のにがな  
人のけく道はお先まゝ暗だ  
どうして三月も別れていたか  
とうとう奇人を失つちまた

海草國門碧，  
多年老异身。  
狐狸方去穴，  
挑偶已登場。  
故里寒云恶，  
炎天凜夜长。  
独沈清冷水，  
能否涤愁腸？

くにでは海草が碧<sup>さざなみ</sup>だのに  
見知らぬ土地で老いぼれた  
むじなが穴にじつこむと  
デクめがちゃんとご登場  
ふるさとも寒ざむとした雪行きで  
真更でもふるえる夜長だ  
冷や、こい川にひとりで飛びこんで  
胸の悲しみは洗えたかい

把酒論当世，  
酒のんで現代論にぶつけれど

先生小酒人、  
大園犹名子、  
漱詠血沈淪、  
此別成終古、  
从茲絕緋韻。  
故人云散後、  
我亦等輕塵。

酒をみんなで眠下げてた  
静室が酩酊してるのでに  
醉えねば沈むもむりけない  
(れ)が最後のお別れだ  
想いたいこともこれさりだ  
仲間は夢と消えちまつ  
わにしもまるで砂ほ(ニ)

「」に「李賀の詩の聲がある。ふと、じづくの歌」口だが、流れる感情は沈鬱だ。「風雨飄  
搖田」に「蘇の「深閨感秋風」(秋涼鏡3169(20813))「臨末飄寒溟」(寒露鏡3139(20783))が、  
「人面画道场」に「孤今道已難」(聽歌圖3141(20785))が「狐狸方去人 桃偶已離場」に「縣  
高鶴食去 漢吏復登堂」が反射的に想起され(ヤハル)。其二、其三は楚辭の「漁父の歌」を典拠と  
するが、「」にわざと楚辞のある箇所がわざりのなこわけではあるまい。「感諷五首」其一  
十月二十七晴。……少し風があり、少し吹いて強くなり、外の外のための素がば「」は  
「」のやうにゆれ落ちる。

「」に、夜微風、已而稍大、窗前素素帳、亂搖侵面。……夜歸だ。最後の四字が賀の「桃代  
紅雨」(特選鏡4210(20854))かナドニモ(ソノモ)、ソウホヤモナシだ。

一九一三年正月二十日微晴。晨忽有人突入室中，自称姓田，餘姚人，竟在室中，嚴詞拒之。  
午後雪止，有日光。

「の文脈での、雪止有日光、にわたして李賀を感じする。

十月一日晴。夜抄入石屏集▽卷第三畢，計二十葉。寫畫時頭眩手戰，似神經又病矣。無日不處憂患中，可哀也。

一九一四年五月二十二日。午後晴。晚雨一陣。動雷。夜大風。星見。

「これらは決して李賀を念頭において書いた文ではないだろ。にもかかわらず、やーに李賀を感じられる。李賀のまなざしと魯迅のそれに共通したことがあるって、それが物えらび、文字に表現するとき、同じ香氣を発するのではないか。

魯迅は月と子供とが好きらしい、と佐藤春夫がいつたことを、増田氏に伝えるが、たしかにかれの作品に「の二つがよく出てきて、その表現もすぐれている。李賀もまたよく月をうたい、「の」もについては「幽兒歌」(2022)(2066)がある。

魯迅を多疑善怒だと批評した者があり、魯迅もまた「血うあまりに猜疑しやすく、あまりに憤怒しやすいことを感じた」といっている。李賀もたぶん多疑善怒だったであろう。自ら人をあざむかぬ人があまりにもしばしば人にあざむかれると、多疑善怒になりがちなものである。多疑といつて「の」にしかし、増田氏のいうように、一面また想像力の豊富といつることでもあり、「の」点でも魯迅と魯迅は共感しているといえるであろう。

二十五歳すでに箇中のものとしていた李賀を、それでは魯迅は、いつこう、どうして知ったのであらうか。

それはいまわたしにはわからぬが、十歳代の中ごろにはすでに知っていたのではないか。譚嗣同などの啓蒙思想家が李賀を鼓吹したこと、かれをうながした一因であろうが、かれの生れ育った浙江省紹興は、清朝における李賀研究の一中心であり、その地の文人が多く李賀を愛したものも大きな潮流と考へなければなるまい。

しかし決定的なものに、増田氏のいうように、兩者の性情氣質の近似にあったであろう。竹内好『魯迅』（昭和十九年日本評論社刊）は熱のこもった好書で、魯迅した時々にとり出して読む。その「思想の形成」に周作人の「魯迅についての二」を引いて、そこからニイチエを酷愛したこと、弱少民族の文学に異常な關心をよせたことを取り出しているが、李賀にはふれない。「中國文學專攻の立場から、魯迅に関する興味は十年來持ち継けてゐる」人の魯迅論としてけ、物足りない感じがした。だが人は気づいたことのすべてをいうわけではなく、ほかにいわねばならぬことのために書いておきたいことの十分の一も書かずになりますことがあるものだ。一冊の書物から、一つの感動を得、一つの知識を学んだら、その著者に感謝していい。

「政治と文學」の章に氏は魯迅の「戰士と魂」という短文を引き、「この文の書かれた民国十四年が孫文の死んだ年であり、「野草」中の大半が書かれた年である」とを指摘し、

孫文に「永遠の革命者」を見た魯迅は、「永遠の革命者」に自己を見たのである。そのこと

はどういふ二とか。彼は文壇に、自己を含めての文壇に「戦士」なしと見たのである。「戦士」ばかりでなく「蠅」やへないと見た。孫文が偉大なのは、彼が「永遠の革命」を信じたからである。自己の生み出した中華民国さへ、革命にあらずとして破却した。孫文は革命の失敗者であるが、あくまでも「革命」の失敗者である。永遠の革命者にとつては、あらゆる革命は失敗である。失敗でない革命は眞の革命でけない。革命の成功は「革命成功セリ」と叫ぶことではなく、永遠の革命を信じて現在を「革命成功セリ」として破却する」とである。……では孫文の象徴するものは何か。「永遠の革命」とは何か。私にとつて、解き難い問題である。それが彼の創造しえなかつた「孤獨者」の人格と、それの註釋である「野草」とに關係があるだろう、どう想像だけは、多分見當外れではないと思ふ。

一一一のところは一一〇の一冊中でも高潮したところであろう。「戦士と蠅」の後半を氏の訳で引く。戦士が戦死したとき、蠅が最初に発見するのは、彼の缺點と傷である。吸いつき、がんがん鳴き、得意になつて、死んだ戦士より英雄だと思つてゐる。だが戦士は、すでに戦死してゐるので、追拂はない。そこで蠅どもは、一層ぶんぶん喰き、自分で結構不朽の聲だと思つてゐる。何故ならば、彼の完全さは寧かに戦士の上にあるから。

確かに、誰もまだ蠅の缺點と傷を見ついたものはない。

だが、缺點のある戦士は畢竟戦士であり、完全な蠅は畢竟蠅に過ぎない。去れ、蠅ども、たどり羽あつて飛び廻るとも、戦士を越えることは絶対に出来ぬのだ。なん

ち蟲けらども。

この「虫けら」の原語は「虫男們」で、この口語を文語にするならばどんどの「范愛農を哀しむ」第一首の「鷄虫」にあたるのではないか。「戦士と蟻」は、たぶん孫文の死に触発されて生れた文であり、その戦士は主として孫文をさすのであろうが、しかし、そこには幾分かは范愛農のよう中途で挫折して人から戦士の列に数えられぬ無名者をこめていたのではないか。

『朝華夕拾』におさめる「范愛農」を読みと、魯迅が范愛農を識ったのは、留学中、東京で、刺客徐錫麟が殺れたとき、「この烈士を弔う同鄉会においてであったことがわかる。

北京に電報を打って清朝政府の無道を痛斥せよと主張したのが魯迅であり「殺した奴は殺したんだし、死んだ奴は死んじまつたんだ、今さら打電も屁つてくれもあるかい」といったのが、烈士の弟子の范愛農だつた。このときの范愛農を魯迅は「眼球白多黑少的人」と描いた。魯迅が范愛農の手詞に「白眼看鷄虫」とうたい、この三首を周作人にあくるとき「忽將鷄虫做入、真是奇妙絕妙絕、辟历一声、群小之大狼狽」(ふくと鷄虫をよみこんだのは、またく奇絶妙絶、ヘキレキ一声、ザコどもびっくり)とわざわざ書きそえたのは、またく奇絶妙絶、ヘキレキとして魯迅が自身を見たからではないか。久魚と傷をさがす蟻ではないにしろ、屁にたかる虫。

このような自覚がさらに深まつた一九二五年の「戦士と蟻」においてへ自己を含めての文壇に「戦士」なしと見なさうにへ「戦士」ばかりでなく「蟻」さえないと見たゞという竹内氏の指摘は、ほんと氣いようがない。

李賀の「感謡五首」の第一に、

都門賣生墓 都の賣生の墓場には  
青蠅久斷絕 蠅やえてんでやつて來ぬ

という句がある。賣生は漢代の革新的な文學者賈誼。文帝がその才能を認めて抜擢したが、重臣たちが「洛陽の人、年少初学、專ら權をほしままにせんと欲し、諸事を紛乱す」とそしつたためやがて文帝もこれをうとんじて左遷した。青蠅は『詩經』小雅・青蠅に「營營たる青蠅は、莫に止る。豈弟の君子、誰言を信するなけれ」により謡曲の後をやす。魯迅の「戰死」にたかる蠅も「營營」叫んだ。また三国吳の韋駘は南海へ流されるとき、おれはおもなく死めだろうが、やのとき弔いにくるのは青蠅だけだろう、といったという。

魯迅が賣生もまた戦士と考えたかどうかはともかく、自己をも命めた文壇に蠅やえいなどするならば、戦士の墓に青蠅が久しく断絶しても不思議ではない。

この理路を逆にたどれば、李賀の「感謡」は魯迅の「戦士と蠅」に到達する。魯迅は李賀の劍を嘲笑することによって、李賀の文学の革命性をすくいだした。だがこれもあるいは謝秀才の妻編練を嘲諷によつてあわれんだ李賀の方法から換骨奪胎したものではないのか。

李賀曰、魏の武帝曹操を「何謝の銅雀妓に追和す」3114(20758)「古鄧城童子謡」3158(20802)

憎悪をかくさずにつたう。これがわたしにはよくわからなかつたが、魯迅の講演「魏晉の風度および文章と茶および酒の関係」を読んで、氷解したと感じた。

この講演についても竹内氏は「政治と文学」の章にすぐれた論を展開し、そこ引用する文の翻訳もいい。それをここに利用する。

……またたとへば曹操は、酒を禁じようとして、酒は國を滅ぼすから禁じなければいかんと申しました。この時も孔融は反対しまして、女が國を滅ぼした例もあるのに、なぜ婚姻を禁じないのかと申したのです。だが、實際は、曹操も酒を飲んだのであります。われわれは彼の「何をもつて憂を解かん。ただ杜康（酒）あるのみ」という詩句によつて、それを知ることが出来ます。彼の行為は何故、議論と矛盾を取つてするのでありますか。それは外でもない、彼は實際家でありますから、かうしなければならなかつたが、孔融は傍観者でありますから、自由な言説が吐けたわけであります。曹操は、孔融が事ごとに自分に反対致しますので、後に口理由を設けて彼を殺してしまひました。その孔融を殺したときの罪状は、主に不孝といふことでありました。……もし曹操が生きてみたら、われわれは訊いてみたいものであります。最初、人才を求める批（公文書一憲雄）は、不忠不孝はかまはめと云つておきながら、今はなぜ不孝の名をもつて人を殺したか。だが實際口、たとひ曹操が生れ変わつてきても、誰も訊くものはありますまい。もし訊いたとすれば、彼は多分われわれも殺してしまふでしょう。

李賀もまたおそらく曹操に、権力を握るために、おのれの言葉の前後擅着も民とも思わず殺人であろうが何であろうが平気でやってのける。実際家の典型を見て、これを憎悪したのである。その観点からすれば、唐の太宗も曹操と同範疇の実際家であり、太宗への批判を曹操にかつけたのかもしれぬ。それならば魯迅が、曹操に因って魯迅の時代の実際家を批判したことは、李賀と軌を一にする。(拙稿「李神通」「唐の太宗」参照)

軌を一にするといふことは、魯迅がいつも李賀を蔑视したなどというつもりはない。模倣者はほとんどつねにその真を把握しない。魯迅は李賀を模倣しなかつた。しかし李賀を学んで、感覚的に見える李賀の詩から思想家李賀を読みとった。その点では、一九一〇年以後に兩後のだけのこのようになってくる「長吉狂」や李賀研究者たちよりも、魯迅の方が、はるかに李賀を深く理解した、とわたしは思う。

ハイネを読みはじめたときの魯迅は、杜甫ならまあ悪くないといったときの魯迅よりも、より一層、李賀を理解する立場にたっていたのではないか。

それならなぜ、李賀の集を机上におかず、ハイネ全集を書架にそなえたのか。  
もとよりそれは、魯迅に聞かねばわからぬことだが、かれにとては李賀は既知のものでありハイネは未知のものであった。それがこの間をとく、少くとも一つの鍵にはなりうるだろう。

辛亥十月十九日——十月二十六日

1971.10.17~11.8

陸・二八

昭和二十一年三月一日、わたしは台湾から復員して京都に帰った。次の日から職をさがし歩いたが、なかなか見つからなかつた。わたしがいちばん希望したのは、どこかあまり忙しくない図書館司書にはいりこむことだつた。当時、京都府立図書館長は内藤乾吉氏で、紹介する人があつてたずねた。薄暗い館長室で茫洋とした表情で、わたしを紹介した人のことをたずねられたのち、「いまはまだご覧のよう万静かなところですが、まもなくたいへん忙しいところになるでしょう。読書人であろうと思われるなら司書は避けたほうがいいでしょう」といわれた。

氏のいわれるような読書人になろうという気があつたわけではない。とにかく月々俸給をくれるところにまずはいりたかったわけで、忙しくない図書館の司書というものは、あわよくばという欲であった。けれども氏からそう聞かされると、はずかしくなつて、それ以上たってと頼めなかつた。

つぎに教員になろうと思ったが、これがなかなかむつかしかつた。それでもある私立中学の方で考えてやろうといつて、これまでいきながら、最後の一々まで、確かな答えが得られない。売り食

いの種は尽きかけていた。

その時創立したばかりの新聞社が社員を募集していた。面接がありて数日して採用通知をうけとった。その次の日、中学から、ほぼ採用の見込みがついたから一慶こい、というハガキをもらった。わたしはすいぶんためらつたあげく、先に採用を決定してくれた新聞社にはいることにつきめ、中学校へいってその由をのべて好意を謝した。

新聞記者といつものがどんな仕事をするものか、わたしはなにも知らなかつた。だいいちわたしは電話といつものは軍隊の手まわし電話しか知らず、車上電話の受話器のどちらに耳をあてるのかさえ知らないなかつた。

入社した日、紹介が終つたあと、手もぢぶさまで半日、新聞のどじいみをひっくりかえしていた。すると編集長が、記事といつものは足で書くものだから、とにかく街へ飛び出したまえ、と教えられた。

仕方なく街に出たものの、七月の照りつける光にただれた歩道を歩いても、目につくのはわたしと同じ復員服の、やせて目ばかりギラギラした男ばかりで、そこからどんな記事が出てくるのやら、さ、っぱりわからなかつた。

その日はたして記事を書いたかどうか、おぼえていない。しかし数日のうちに曲りなりに記事らしいものを書いていたのだろう。昭和二十九年三月まで、足かけ九年、それで飯を食つたのだから。

小さい新聞社だから、何でもやつた、どんな記事でも書いた。しかし、わたしはいろおう文化部員ということになっていた。寺や、学校や、図書館がわたしの持場になっていた。送った原稿がその日、あるいは次の日に紙面にのることはあまりなく、忘れたころにバカでかい見出しがつたりした。驚いて聞くと、今日は記事がなくてなあ、といつた調子だった。

出さきで二、三本記事がかけると、わたしの原稿はたいてい電話で送る必要はなかつたから、それをかばんに突つこんで、市立図書館や、大学図書館にいき、二、三時間、本を読んだ。読んだものから記事のかけることもあるって、そんなどきけさらには二、三時間、該書を自分に許した。

ある日、やはりそつして市立図書館で時間をすごしていたとき『二豊文人志』という本の中で中島子玉、という詩人を知つた。子玉は李賀を愛し、長吉体の詩をつくり、夭逝した。

いま、わたしは『二豊文人志』の著者の名前を、忘れてしまつている。またそこから写しとたけすの子玉の詩を託したノートを、どこにほうりこんだのかわからぬ。しかし、当時の興奮はよみがえる。

## 二

十月四日、草森紳一氏からもうたはがきに返事をかぎ、「江戸時代の九州の詩人に中島子玉という人がいて、李賀を模倣しています、ご存知でしょうか」といつて意味のこゝを書きそえた。

子玉の集はまだ上板されていない、と『二豊文人志』はいっていた。子玉の詩を読みなおすためにには、もう一度『二豊文人志』を読むほかはない。府立図書館にゆかねばならぬ。

ところで、その府立図書館は、内藤氏がいわれた通り、まもなくアメリカ占領軍の指導で、アメリカ式図書館として動きまわることとなり、内藤氏は館長をやめられ、新任館長が大いに活躍、分館がふえ、さらに資料館が創立され、古書類は資料館にうつったとも聞いた。その上どちらし毎日過疎らしく、図書館のほうよく入館者が行列している。わたしもまた新聞記者のころのようすに手軽るに走っていけない。司書にならなくて、ほんとうによかったのではあるけれど。

ふと思いついて、勤め先の大学図書館で清の俞樾の編んだ『東瀛詩選』を見た。累してあつた、卷十七の中島大齋がそれである。

字は子玉、號は米華。<sup>豊後の人</sup>著に米華遺稿二卷あり。子玉、官は儒官、學政を主どる。年僅かに三十有四にして卒す。臨終に一絶句を口占して曰く、……亦た奇士なり。詩は未だ刊刻せず。ただ寫本の字跡の多く辨すべからざるもの有り、故に錄する所、タキ一ことなきし、その佳句は固より此に盡ります。

俞樾はこう説明して、三十四首を錄している。この数は、<sup>八十歳で死んで</sup>石川丈山の四十八首、あるいは七十五歳で死んだ広瀬淡窓の八十九首にくらべると、決して少ないとはいえない。評語もまた充分好意的だといってよい。中に「夢李長吉」「李長吉を夢む」一首がある。

夜夢神宮傳天語  
手中拈花撒江雨  
金門半開雲微白  
雲樓瓊閣誰是主  
龍西才子通眉容  
錦囊曾拭青蛇角  
王桺記成不知年  
天上桂子幾回落

夜夢む 神宮より天語を伝うるを  
手中に花を拈めば 江雨撒る  
金門半げ開いて 雲微かに白し  
雲樓瓊閣誰か是れ主  
龍西の才子 通眉の容  
錦囊曾て拭う 青蛇の角  
王桺の記 成つて 年を知らず  
天上の桂子 幾回か落ちし  
詩あり 吾 且らく君が爲に歌わん  
手あらば 君も亦た 吾が爲に拍て  
如今騒人喜末詩  
如今騒人 宋詩を書こぶ  
黑鳳誰分雄與雌  
誰か分たん 雄と雌を  
燕石十製各自珍  
十裏 各おの自ら珍どし  
荆璞三缺無人知  
三たび缺するも 人の知る無し  
曉窗驚坐悄無有  
曉窗に驚き、坐すれば 悄として有る無し  
一巻遺稿當好友  
一巻の遺稿 好友に当つ  
悲風嘯落青林月  
悲風 嘶落す 青林の月

詩三回せお詫の「朱山賦」1021(20665)の「驥聲半隱風雲」にはとんでもないか使つてゐる。116「驥」を姚家本の「驥」へもやうだから（陳弘治校記）子玉に姚家本を取つていたのかもしれぬ。第四回は「龍軒閣」4192(20836)の「東京才子文書」、第八回は「官衙獄」4214(20858)の「幾迴天上舞神仙」や「楓近曉」5233(20877)の「桂花幾度圓還落」などを用ひたのである。だがそれにもまして、子玉の詩篇に取やう體側の情がよくあらわれてなつかしい。

明の邊臣顧炎武の「田家錄」卷十九「文人摹倣之病」の條に「楚辭を模倣する者はかなうず其辭に及ばぬ。（漢の枚無の）七言を模倣する者はかなうず七言には及ばぬ。たぶん、模倣者の意識にすでに入手があつて、その通りにせねばならぬといふ氣持に支配され、筆力が自由にのびないからだ」という。これは實に恐しいほど的確な指摘で、子玉の三十四首もまたとうてい李賀の右に出るものなどはない。その一例流れるにすぎぬ。けだしも、そりあで云ふ「而しきえは實もふたもなくなつてしむし」、されば我が國の詩人のうちに李賀を愛した人を求めることも無用だ。わたしが一時期、子玉の詩を写し、宮崎宣政の『晴灑焚詩』をしながら、まもなくかれから遠ざかって眠く歸りみなかたのは、美もふたもないほんに李賀のものに固執しためだろうか。そのわたしが、いままたかれうにひかれやうなのに、世人老いぼれてやだのだろうか。

少年の日にしか見出だせぬ眞実といふものがあり、李賀の詩は正しくそれだ。だとすれば李賀の詩を本当に理解するものは少年であろう。わたしはすでに李賀の読者たる資格を失つてゐる。少年の日に親しんで、かれが累して友として許すかどうかわからぬままに、かれのもとから立ち去りえない。永遠に少年であるかれの前で、誠だむおのれの手をみていると、無慚だが、もしできるものなら、新しい少年が李賀の新しい眞実を握りおこしてくれるのを見まもりたい。そんな気持のなかでは、李賀を愛してその周辺をさまよつた先人たちのわざを、ひとごととは思えなくなってきたのだ。

## 三

呼べば来たるとはこのことだろうか。中島子玉に執筆してうろうろしているとき、忽然として、阿刀弘文氏のことと思いつかべた。

電話帳を繰ると、氏の電話は四本あり、二本は中京で職業の記載はない、一本は西区で僧職、もう一本は上京でアパートである。中京の一本にかけると、電話口に出た人が、しばらくのみ待ち下さいといい、それから長いこと待つた。

氏をはじめて知ったのは昭和二十七年の十一月だった。当時わたしは新聞社では論説委員ということになっていたが、論説などけほんど書かず、「京女系図」「亭主操縦術」「あの人」の